

兵庫県医師会医療支援チーム（第30陣）「宮城県災害支援現地報告」

神戸市西区医師会 浅見 英夫

仙台空港に降り立ち、まず、空港自体が被災地であることを実感しました。到着と搭乗のみの極めてシンプルな機能が与えられた空港に驚き、タクシーにて石巻に移動を開始しました。石巻への往路から見える光景は、報道番組で目にする光景とは別物で、今回の震災の悲惨さを痛感するに十分なものでした。未だ手つかずのがれきや横転したままの車や船、そして何よりも、板きれを地面に刺しただけの、墓碑銘の並ぶ共同墓地に胸を押し潰されそうになりつつ、石巻中学に到着しました。第29陣の先生方から申し送りを受け、早速、医療活動を開始しました。実際、診療を開始してみると、現在の避難所での医療ニーズはすでに低く、少数の方の、しかも慢性疾患に対する診療が主だった医療行為となっておりました。今回の医療支援を通じて感じた事は、石巻に必要なことは、避難所のみならず、市内に暮らす方々の医療支援よりも、むしろ漠たる展望ではなく、ある程度、具体的な生活の基盤の回復に向けた行政の指針の提示であると感じました。震災の被害は大きく復興に如何ほどの時間を要するか想像もつきにくいですが、神戸の様な一日も早い復興を望んでやみません。未筆ながら、この度の活動でご一緒させていただいた先生方や看護師さん、薬剤師さん、そして事務局の方、皆さん意欲的かつ献身的に活動されたとともに、素晴らしいチームワークを発揮していただいた事、深く感謝いたします。

